

4章 考察

1. 明らかになったこと

今回の研究で明らかになったことをまとめてみよう。アンケート調査から子どもたちを学校に向かわせている要因として、学習に対する興味(内発的動機づけ)、学校に行かないと親が心配するなどというような周囲からの罰による消極的理由(外発的動機づけ)とともに、集団性・友人との交流が大きいという点である。学習に対する興味というのは、いわば学校のフォーマルな側面への期待であり適応であるが、集団性や友人との交流を求めるといふ部分が重要といふことは、学校のインフォーマルな側面にも子どもたちは大きく期待していることがわかる。また、子どもたちにとって学校から遠ざける心理的な要因には、校則が厳しいから、先生がいやだから、授業がおもしろくないからといったフォーマルな部分への抵抗感とともに、友だちとうまくいかない、クラスの雰囲気になじめないなどのインフォーマルな集団性・友人関係への不適応があげられる。

また、家族面接調査からは、コミュニケーションの場としての家族の機能の重要性と多様性について考察した。家族は一見何の問題もなく交流しているようで、実はそうでもない。そのあたりの実体は、家族のプライバシーという厚い壁に隠れ、教師たちを含め外部の第三者には見えにくい所である。この部分が案外、子どもたちにとっての閉ざされた小集団における行動・コミュニケーションの動機を決定づけ、学校でのインフォーマルな場面での活躍も影響しているのではないかということが部分的にせよ確認することができた。私が児童精神科医として臨床上接する不登校の子どもたちの多くは、勉学への不適応というよりは、友人関係に悩み、集団性に耐えきれず、学校を休むケースが多い。彼らのインフォーマルな場面への不適応は、その根底には、家族というもっとも親密であるべき集団の機能不全が隠されているように思える。

2. 「場」のなりたち

今の中学生にとって、はたして意欲的になれる場はあるのだろうか。「場」の成り立ちについてももう少し考えてみよう。

表22 ふたつの集団のあり方

「場」を共有することによる集団 Group as a container	「個」の結びつきを中心とした集団 Individuality oriented group
学級王国 家父長制 閉ざされた境界 団結 リーダーシップ 権威 同質性 (個性の埋没) 外的規範の共有	開かれた境界 確かなコミュニケーション 異質性 (個性の尊重) 内的規範の創造

表22にまとめたとおり、ふたつの「場」の成り立ち方が対比される。従来の集団は、「場」を共有することによって成り立っていた。その「場」には確かな集団としての規範性、権威性があった。学校では学級王国といわれるように、担任教師がすべてを抱え込み、リーダーシップを発揮することによって確かな集団として機能していた。家庭でも同様である。かつての家族には、生活の場としてのコンテナ(容器)の機能が備わっていた。家父長制は、現代社会の文脈からは必ずしも肯定的に評価されないが、そのような確固とした家族という枠組みがある時代には、それが時には弱者である女性や子どもの犠牲のもとに成り立っていたのであるが、安定した場を提供していた。タテ関係の人間関係は、上位にいる人は自分自身を不確かな存在として認識していたとしても、下位にいる人間にとって、それは確固とした存在であり、確かな規範性を提供する。

このような場が確かな存在として機能するために必要な要件は表22のとおり、閉ざされた境界、団結、リーダーシップ、権威性などである。集団の境界が閉ざされているということは、外と内が明確に区別され、うちにおける集団同一性を高める作用がある。しっかりとした枠に組み込まれた集団は特定の価値観が伝達し共有されるために、秩序が必要である。それを支えるのが権威性

であり、そこへの服従である。集団性が優先され、他者と異なる個性の部分は抑制される。そのようにして、集団を構成するメンバーは物理的・精神的に安定して存在することが可能となる。従来の学校も家庭も、これらが備わっていた。学校の授業は教科という価値観であり、そのような確かな知識が権威者である教師によって効率よく伝達される。そして、クラスのメンバーは一丸となって団結し、強い集団への帰属意識によって満たされる。

このように考えれば、学習に対する興味、勉学に対する意欲というのは、学校や家族、さらには社会全体が容認した確固たる価値観へ帰属しようとする動機づけに他ならない。勉学の大切さという明治以来優先させてきた外的規範を集団内に均一に満たすことによって、集団をひとつにまとめあげることができ、確かな価値観と安定性をつくりだすことができる。学力至上主義はそのような外的規範のひとつであり、それが肥大化したものである。勉強に対する興味・意欲を失うということは、学校という集団への帰属意欲を低下させるものであり、学校という場自体の存続があやくなるわけであるから、集団の中において安定性を保っているものにとっては脅威である。

3. 「学校」「家族」の場の機能の変化

このような「場」を共有することによる集団は、それを支える社会的・文化的な基盤があってはじめてうまく機能するはずである。教師が社会的にも尊敬され、子どもたちにとっての権威として機能し、子どもたちの唯一自己を投影できる場であった時代には、十分に「場」を共有することができた。しかし、現代社会の情勢を見ると、以前のようなかたちで「場」を維持することは、その努力自体に無理が来ているように思える。

教師の権威は失墜し、塾や各種お稽古ごとによって、学校は子どもたちが生きる場としての絶対性が薄くなった。学校という場は安定性と確かさを共有できなくなり、教師たちがそれを復活しようと努力しようとするほど、子どもたちは離れていくという現象が見られる。

家族も同様である。従来の家父長的な大きな家族は、実体としては存続していたとしても、規範としては消えつつある。核家族化、少子化と共に家族の規模は縮小し、衣食住や生きがいの場としての家族の機能は縮小した。「寝に帰るだけ」的な家族のあり方は父親たちに限らず、母親たちにとっても、子どもたちにとっても現実となりつつある。確固とした価値観を生み、維持するという機能は、もはや家族にはないかのように見える。それを裏づけるだけの規範性も、閉ざされた境界も、権威もなくなっているというのが現状である。

4. 第三者としての父親の役割

中学生の子どもたちに限ってみても、社会化という家族が果たすべき重要な役割が失われつつある。思春期以前の子どもたちは母親との関係が中心であるが、思春期になるとそのような母子的なエロスの世界から決別し、自己が未知なる外の世界へ投影されるようになる。このような社会化のプロセスに必要なのが母親以外の第三者の存在である。それは第三者なら誰でもよいというわけではなく、ある程度の親密性と異質性を兼ね備えた人である。多くの場合その役割を担ってきたのが父親であった。近くもあり遠くもある父親と対決し、和解し、信頼するという経験を経ることによって、はじめて社会における他者との信頼関係を構築できるようになる。ところが形はあっても中身がない現代の「ホテル家族」では、父親が父親として機能していない。子どもたちは家に残り残された母親と強固なエロスの世界を形作り、母子密着を解き放ってくれる第三者の存在が得られなくなった。そのために、思春期になって、友達がエロスの関係からロゴス的な関係に転換すると、社会における他者としての学校における人間関係を保つ経験も自信もないために、そのような関係性を維持することに過大な不安を抱き、不登校などの形をとって、社会に出てゆくことを無意識のうちに拒否するようになる。

5. 意欲的になれる「場」をつくれるか

それでは、中学生にとって、これから必要な場の要件とはどのようなものだろうか。はたして中学生が「意欲的になれる場」をつくることのできるのだろうか。そのためには、従来の「場」のあり方を根本的に見直す必要があると考える。具体的に言えば、「場」を共有することによる集団のあり方から、「個」と「個」の結びつきを基盤とした集団へ転換する必要がある。

子どもにとっても、大人にとっても、生きていく上で安定性と行動の規範となる確かさが必要である。それを従来は、確かな集団性に求めていたわけであるが、もうひとつのやりかたとして、個の結びつきを中心とした集団性ということ想定することができる。これは表22の右側に相当するわけであるが、従来、外的規範を共有することによって保たれていた規範性を、内的規範をその集団内で生み出そうとする。つまり、これだけ社会的な価値観が多様化した時代には、外的規範の確かさ自体があやうくなっているのだから、安心して外部からの規範を借りることができなくなった。むしろ、そのような多様性を認めた上で、自分にとっての個別の規範が必要になるわけで、それを生み出す力が集団の中に備わっていなければならない。

6. 個と個を結ぶコミュニケーション

それは端的に言えば、個人と個人の間には交わされるコミュニケーションである。対話し、言葉を交わすことによって個々の現象が文脈化される。文脈が造り出されることが繰り返されることによって、ひとつの現実が生まれる。つまり、個々の現象について会話し、意味づけ、それを他者に伝えて承認されることによって「確かさ」が生まれる。従来の「場」を共有することによる集団の中では、自己の存在は集団内での相対的位置によって確かめられた。一方、ここで求めている新しい集団のあり方の中では、対話によって自己の存在が他者に向かって表現され、それが受け入れられた瞬間に自己の存在は確かめられる。そして、その喜びが意欲につながる。

7. 「友人との交流に対する意欲」がカギ

今回の調査では、学校生活に参加する動機づけとして、学習そのものに対する興味と、集団性・友人との交流に対する意欲のふたつを区別した。このように考えると、前者は学習という外的規範を自己の価値観に取り込むという意味で集団性を指向した集団への意欲であり、後者は自発的・双方向的なコミュニケーションへの意欲といえる。時代の流れからしても、前者の意欲のみによる学校のあり方には無理がきていることは述べたとおりであり、後者の意欲が今後、中学生が意欲的になることができるためのカギとなる。また、このような個と個を結ぶコミュニケーションは友達レベルばかりではなく、教師を含めた学校全体のコミュニケーションのありかたとして育成してゆかねばならない。

8. 意欲を育てる「場」としての学校

① 教師—生徒間の共感的関係

個と個を結ぶコミュニケーションを育成する場としての学校とはいかなるものであろうか。

まず、規範性とまなざしによる集団経営からの脱却である。その上で、子どもとの双方向的な、情緒レベルでの交流・コミュニケーションを図る。現状の学校体制では、真の意味で子どもの話を聞くことは難しいことなのかもしれない。いわゆる指導とは、教師から生徒への一方的な情報伝達であり、ここでいうコミュニケーションではない。自己の存在が他者に向かって表現され、それが他者によって受け入れられた瞬間の喜びが意欲につながる。学習などの成果が他人から認められることによって成就感となり、さらにはそれが自信へと

結びつく。成果を認めるということは、特別なことではない。何かを達成しなくても、普段の日常生活の何気ない交流の中で生み出すことができる。

本研究でも明らかになった、第三者の人間関係に適応できない子どもたちにとって必要なものは、母子関係的な親密性であり、それを教師-生徒関係の中である程度再現してあげることも過渡的な配慮として必要なかもしれない。それは権威と規範性によっては決して達成することはできず、個別の人的なふれあいを必要とする。教育用語としてのカウンセリング・マインドはこのような心理療法で用いる共感的関係を教師-生徒間に応用することである。そのこと自体は効果的であるが、担任教師がカウンセラーの役割まで担うことは、ややもすると学級王国の強化につながる危険性も含んでいることも認識しておかなければならない。

②個の尊重と平等

第2に、個の尊重である。場の雰囲気依存しなくてもやっていける能力は西洋的な自我のあり方としての「個」に近いものである。これは決して文化的に規定されているものではなく、子どもたちの成長過程における人間関係の中で育まれるものである。子どもたちとの個別の結びつきを大切にし、子どもの個人個人の差異に関心をはらい、尊重する。教師たちが子どもへの個別の対応に消極的な理由として「えこひいき」を避けるという気持ちがある。えこひいきは個別の対応の結果、それらにいい・悪いの価値判断を与える結果おこる現象である。子どもたちや親たちにはびこる平等幻想がある限り、そのようなそしりを受ける危惧は避けられないが、これからの教育には本当の意味での個の尊重が重要となる。えこひいきを避け平等に接するということが一見好ましいように思えるが、実は子どもの個性を認めていないことになる。

③学級の解放性

第3に、学級の開放性である。閉鎖的な学級、あるいは閉鎖的な学校を必要とするのは、権威性による均一な価値観による指導を目指していることの表れである。ひとたび、個の結びつきを中心とした集団のあり方に転換することができれば、閉鎖的な学校システムは必要なくなるばかりでなく、健全な学校のあり方として足かせとなる。私が訪ねた英国の中学校では、教室に親たちによるボランティアが自由に入り込み、教師と生徒たちをつなぐ機能を果たしていた。ティーム・ティーチングや学校カウンセラーの導入も閉鎖的な学校システムを変化させる可能性を秘めている。

④電子メディアによる教育

最後に、新しい「場」の可能性として、電子メディアによる教育を指摘しておきたい。インターネットが開く新たな現実の世界は、既存の「場」とは全く異なる特性を持っている。物理的な場は存在しない。子どもたちひとりひとりがパソコンの端末に向かうことによって、その背後に世界が広がる。そこでは、自分の発言という能動性によってのみ、「場」が作られるわけで、情報発信能力がどうしても必要となってくる。教室という壁は存在せず、開放的な世界であり、閉ざされた境界を作ることを求める教師にとっては脅威である。このようなメディアの世界をうまく使うことによって、新しい、自立した「個」が生まれるかもしれない。もちろん、まだ発展途上の世界であり、さまざまな危険性や解決しなければならない問題点も含まれるが、新しい学校のあり方を模索する上で見逃すことができないのも事実である。